



## 「極上々」の茶入 — 殿様、お好みの道具を入手する —

天保十三年（一八四二）暮れの

十二月、彦根藩井伊家十二代直亮（二七九〇〜一八五四）は、藩領内の長浜の町人から、小堀家代々所持の茶道具を含む品を一括して購入しました。これら購入品を直亮自身が詳しく記した一冊の目録「長印物帳」が伝わっています。

この目録の筆頭を飾るのが、唐物鶴首茶入です。唐物とは中国製、鶴首とは細く長い首のことをいいます。中国・宋代の十三世紀の作と考えられるもので、高さが七・九センチ、黒褐色の釉薬に鶉の羽毛のような斑文様が生じており、その端正な形も含め、典雅なたたずまいを感じ



◀唐物鶴首茶入（当館蔵）

させる優品です。

実は「長印物帳」は、傷みのために開くことさえできない状態でしたが、近年の修理でその内容がようやく明らかになりました。しかし残念ながら、欠損した部分も多くあり、完全に解読することはできません。

その中で読み取ることができるのは、この茶入は江戸時代前期の大名茶人で、遠州流の祖ともなった小堀遠州（一五七九〜一六四七）の秘蔵の品であること、これに三代将軍家光の日光東照宮への社参と関連があるような文が続くのですが、この部分が欠損してはつきりしません。

そこで、世に「遠州蔵帳」と呼ばれる、遠州所持品を中心にした帳面を手繰ってみると、確かに、鶴首茶入が登場し、品川御殿で御茶を献上した際に用いられた旨が記されています。具体的には、寛永十三年（一六三六）、徳川将軍家の鷹狩場があった品川の御殿が整備され、五月二十一日、家光が日光社参の後にここに渡御し、新たな茶亭において、

幕命で遠州が献茶をしており、この重要な場で鶴首茶入が用いられたという事です。「長印物帳」の記載は、まさしくこのことを記していると思われるのです。

遠州蔵帳は複数あり、中でも、小堀家所持本は、茶道具の寸法、重さ、肌、色合いなどの特徴や、附属品の仕様に至るまで細かく書き上げられ



◀同 附属品（当館蔵）

ています。これを見ると、直亮が購入した鶴首茶入の特徴や附属品とほぼ一致するので、遠州旧蔵品と考えてほぼ間違いないと見られます。

直亮は、この鶴首茶入を、「極上々」という最高の位づけをしました。これは、品そのものの価値に加え、旧所蔵者や来歴など、その由緒も加えての判断だと思われます。この茶入はすぐに、「茶帳」という茶道具の基本台帳と思われる台帳の七十八番として、井伊家の大名道具の仲間入りを果たしました。

大名道具は一般に、いつどいつた経緯で入手したのか分かるものはほんの一部に過ぎません。入手の状況がその場に居合わせたかのように分かるのは、類いまれな、丹念に記録する直亮の性分のおかげです。

【彦根城博物館学芸員 高木文恵】

唐物鶴首茶入は、テーマ展「数寄と清風―井伊直亮の茶の湯と煎茶―」で3月20日水祝〜4月22日（月）の期間、展示します（期間中無休）。